

U30 都市計画 - 設計提案競技

復興デザイン 静清計画 2013 を考える

風景づくり夏の学校

インタビュー 開校にあたって

陣内秀信

聞き手：羽藤英二

羽藤：陣内先生、日野ではお世話になりました。今日はよろしくお願ひします。

陣内：はい、こちらこそ。

羽藤：今回のU30都市計画設計提案競技では、静清計画2013を考へるといふテーマを設定しています。

静清プランは、丹下さんが1970年に発表した清水と静岡両方包含した都市計画です。今回提案競技の対象としている静岡市は、旧清水市と静岡市が合併してできたわけですが、当時二つの都市を一体化させる形でアーバンデザイン、交通、ランドスケープを同時に考へたプランを丹下さんは二つの市に向けて提案しています。で、1970年から40年以上経った今、若い人たちにこの地域の都市計画、都市設計を改めて考へてもらいたいと考へました。内藤先生にも特別審査員という形でお願ひしているんですが、実は都市計画学会60周年の際に、僕が主査で都市計画2050年論という企画を立てたんですが、そのときも今回と同じように内藤先生と陣内先生に次の時代の都市計画について論じて頂くことをお願ひしました。内藤先生はどちらかというとエンジニアとして建築から都市へと、徹頭徹尾主客逆転させて尚拡張してしまつた対象領域を考へ尽くさないといけないという言い方をされていたように思ひます。ただ都市計画全般の中ではもう少し違つた方法論もあるのではないかと、第三の方法といふべきではないでしょうか、今経済や政治、あるいはテクノロジーのような強い力によってかき消されているように見えるけれど、それぞれの土地には、江戸より遥か以前から歴史があつたり、その痕跡として水路が残つていたり、そういうものを自分たちの生活景から考へなおして再編集するといふ陣内先生流の方法論をお聞きして感銘を受けたんですけど、今回、若手建築家だつたり都市計画をやっている人、学生さんだつたり、若い人が参加する都市計画設計提案競技で、これが重要なんじゃないかという点をまずお聞きください。

陣内：ちょっと視点が違うかもしれないけれど、日本で本当に草食系男子ばかりになつてきたよね。

羽藤：そこの話ですか(笑)。

陣内：保育園から幼稚園、小学校、みんな女性の保育さんばかりに習うでしょ、日本では。

羽藤：そうですね。

陣内：家庭にはお母さんしかいないし、親戚が集まることもないし、街に出ることもないし。だからしょうがないんですよ、女性原理の中で育つちゃう。男性的原理、おじさんとか、猥雑なものとか、そういうたくましく育つ機会がない。一方イタリアは、街の中にみんな出るし、アートが媒介して、とにかく子どもたちはみんな街路で遊んでいるから、周りは怪しげなおじさんとか、悪がきとか。

羽藤：酔ってる人もいるしね(笑)。

陣内：みんなその中でたくましくコミュニケーションして、色々知識を得て、逞しく自分の生き方を学んでいくわけですよ。根本的にね、これ問題だと思うんですよ。

羽藤：そこから来ましたか。

陣内：で、僕ほんとにショックを受けたんですよ。これは日本ゆゆしき問題じゃないですかね。つまり、都市計画の中で機能に純化しちゃつて、インフラとか仕分けして計画していくと、やっぱり効率がいいほうがいいに決まってるみたいになつて、市場の論理でどんどん行つてしまつて、今日本が進んでいる方向は全部草食系男子を育てる方向に行つてるんじゃないかと思ひます。これやばいと思う。何が言いたいか、複合系の都市をつくらなくちゃいけないと思う。複合系をよしとする、その中でみんな逞しく生きていく場をつくる必要がある。それはやっぱり、歴史を持っているところが複雑なわけです。近代になつて論理を整理して、わかりやすく計画したところでは複合系はつくれません。人間環境もそんなに簡単に調整なんてできないし、レイヤーが重なつていて色々な要素がある。絡み合つていて、だけれど有機的に関係が、地形とかエコロジーの問題と絡んでいると思うんだけど、複雑に見えるけ

れどある種の論理があるといふた、そういう場所のほうがいいがやっぱり面白いし、これからむしろ強いんじゃないか。ある時期の考へ方、計画手法で、ゼロから一気につくつちやつたところは、複雑系にならないから。

羽藤：弱い、脆弱ということですよ。

陣内：状況がかわつたら駄目ですよ。サステイナブルじゃない。ニュータウンはそれで一番脆いわけですけども、空間の論理がシンプルなのと、人間関係がシンプル。でも、次の時代になかなか対応できない。プログラムを変えていくのに、今、汲々としているわけですよ。

羽藤：そんな感じはありますよね。

陣内：歴史とエコロジーといふところからすると、水にこだわっているのは、やはり川があつて、源流から河口、海まで、全部そういうつながりがあつて、エコロジーがあつて、場があつて、地形とつながつてできているわけで、それに対して、人為的に頑張つて用水路とか上水を尾根に通したりして、人間が介入しながら、またそういう仕組みをつくつてきた。

羽藤：自然を生活の中に取り込んできたと。

陣内：そういう仕組みがあるわけです。単に自然の論理に従つていないんじゃないんだけれど、自然をうまく人間がつくりながつてきた、そういう命題をもう一度見直す、そういう都市計画にならなきゃいけない。だからやっぱり、複雑系といふか、重なつていものに目を向けてほしいと思ひます。

羽藤：複雑系、重なりを生み出すデザインが、ひとつのキーワードだと。

陣内：僕が地中海、南イタリアにこだわっているのは、中村雄二郎という先生が「南欧型の知」を説いているんだけど、80年代からずっとデカルトじゃなくてヴィーコというナポリの哲学者に注目して、個人主義じゃない、個人で「我思ふ故に我あり」じゃない、みんなの中で、ネットワーク社会の中でたくましく生きていく人間像を説いています。それじゃないともうやつていけない、矛盾にも答えられないし、解決できない。近代がつくりだした、環境や周りとの関係において自分を捉えるとか、その中で動いていくダイナミズムっていうのは、問題が複雑すぎるわけです。今そういうものに対応できる人間と社会が求められている。だから混沌とした中でみんな逞しくやつてる良さをもう一回日本で取り込まないといけない。MITの学生は世界中から来ているから、4年5年でみんなすごい逞しくなるって話を聞きました。日本は全然ちがう(笑)。

羽藤：暮らしたり学んだりする環境があまりにも整えられている。少子高齢化なんていうのも沖繩が出生率が高いんですよ。あそこは離婚も結婚も何回もやるんだけど、町を歩けばわかりますけど、子供が街場で育つみたいないな感覚があるんですよ。家族、親戚みんなで子供を育てる。犯罪があつたり、色々あつたりもするんだけど、生命力がある。

陣内：そうそうそう。

羽藤：いきいきしてますよね。街場で育つみたいないな感覚が日本の都市計画や都市設計を考へている際、そういうものに価値があるんだっていう感覚が薄いように感じています。都市計画の教育のカリキュラムも広域があつて中域があつて地区計画がある。交通を考へて、ランドスケープをやつて、そうやって専門を仕分けして、個別の専門性と技能で都市計画に承認を与えているという制度がある。でもそれを統合して、これが本当の都市なんだといふところが、本当にこれでいいのか。

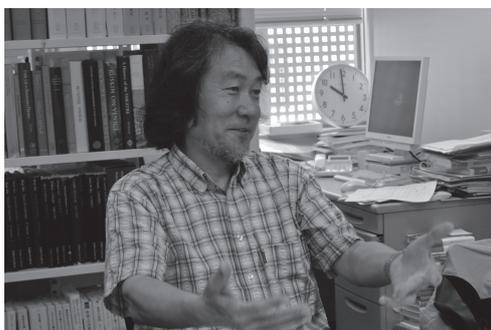
陣内：だんだんみんな本当に、良い都市だつたり、面白い都市、或いは人間がちゃんと逞しく育つ都市がどういふものかといふイメージなのか、専門家の間にも行政の間にも、なくなつちやつたんじゃないかと思ひます。

羽藤：それを描かないといけないし、考へないといけない。あるいは、薄まつてしまつたかもしれないけど、そういう都市のエッセンスを継承するといふところが

陣内秀信 じんない・ひでのぶ

1947年福岡県生まれ。法政大学工学部教授。パレルモ大学、トレント大学、ローマ大学にて契約教授。東京大学大学院工学系研究科修士・工学博士。イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学に留学、ユネスコのローマ・センターで研修。専門はイタリア建築史・都市史。

主な著書：1992年『東京の空間人類学』筑摩書房、1992年『ヴェネツィア-水上の迷宮都市』講談社、2002年『水辺から都市を読む-舟運で栄えた港町』法政大学出版局(共編著)、2002年『イスラーム世界の都市空間』法政大学出版局(共編著)、2005年『南イタリア都市の居住空間』中央公論美術出版(編著)、2007年『地中海世界の都市と住居』山川出版社など。受賞歴：サントリー学芸賞、建築学会賞、地中海学会賞、イタリア共和国功労勲章(ウッフィチャーレ章)、日本建築学会賞、パルマ市「水の書物」国際賞、ローマ大学名誉学位号



疎かになってしまっている気がします。

陣内: 例えば歴史的な都市が価値があるといった時、結局、純化して、重要伝統的建造物群みたいになっちゃう、それは教育委員会が担当で、観光にはまあつながるかもしれないけれど。

羽藤: U30 の人達に本当によく考えてもらいたい。専門家の技能だけが特化していだけで、本当にいい都市が育っていつているのかということなんです。もう一度いい都市とは何かということまで寄せてどうかということに問いがあってほしいと思います。

陣内: だからビジョンもなかなか描けなくなっちゃうしね。この間、原宿のまちづくりのリーダーの人と仲良くしているんですけれど。

羽藤: 相変わらず活動してますね (笑)

陣内: 商売やっている人なんですけど、すごく見識があって、表参道は今、けやき会っていうんですけど、そのリーダーで。区にも申すという雰囲気なんだよね。原宿駅前の商店街をとりまとめたような、そういう集団のリーダーでもあって。明治神宮と色んなことやってるんですよね。明治神宮の研究所があるんですけれど、そこと組んで、アカリウムといったかな、ほんのり大きな森を夜照らすということをやったり、環境問題で明治神宮と原宿をつなげようというようにすることもやっている。明治神宮に清正の井というのがあって、そこからこんこんと湧く水が今も流れているんです。それが原宿の方について、裏原宿、それからキャットストリートについて、渋谷川に流れ込んでいる。そういう緑と水の本来その場が持っている力を原宿にもつなげていって、もともと流れていたわけですからね。地下鉄の表参道駅にどどん水が湧くんですよ。ポンプアップすれば水が湧くんですよ。もともと明治神宮とつながって、原宿は、近代にできたわけだから、そういう大きな構想で、車も制御してやろうとやってわけだから、リアルなんだよね。けやき会 100 周年だから。

羽藤: そうですね、明治の森 100 年なんですよ。

陣内: 100 周年の記念誌をつくるから、そういう提案をぶち上げるという、あの土地の一番の根幹を大切にしながら、原宿らしい日本らしいなと思います。フライブルクだって環境の都市、清流が流れているところありますよね。トラムと両方有名なんですけど。違う意味での水の都市なわけです。今までフライブルクは水の都市といっても舟運とか港町とかそういうふうに見てきたけど、本当に街の中に水がいっぱい流れてます。ちょっと感銘をうけたんですよ。

羽藤: フライブルク周辺の住宅地も、シェーンベルク山ですかね、あそこからの風を取り込んで、河川や小川の流れを住宅地に取り込んで、緑のパッチをあてて、街に自然をなじませることに腐心しています。

陣内: ね、そういうことが日本であっていいわけで、一番向いてるし、本来あったわけですよ。東京もそうだし、地方都市だって水路流れているところいっぱいあるわけです。

羽藤: 静岡も安倍川があって、町の歴史の中では治水を相当やってきています。

陣内: そういう本来の日本の都市が持っていた、単に、人工物で固めちゃうんじゃない、ネットワークとして、水が行き交っていたという事実がある。

羽藤: 静岡も常磐公園と青葉通りというのがあって、あれは昭和大火災のあとにできた防火道路なんですけど、そこにはもともと逍遙もあって水路を引き込んでいたそうです。それがいつの間にかやっぱり暗渠になってしまった。日本の場合、交通機能とか安全という機能の話が出てきてします。でも、まちって本当にそういうものなのかっていう話はわかります。

陣内: 地下鉄やポンプアップの技術というのは、まさに近代だからできることです。水の資源があるなら、清溪川じゃないけれど、循環させてそういうところにテクノロジーを使うべきだなと思います。

羽藤: 若手の方が静岡舞台に都市計画、都市設計と挑むわけですが、先生も色んな学生さん指導したり、コ

ンペの審査もしてきたと思いますが、こういうような提案は評価したいとか、こういう提案はちょっとどうなんだ、っていうあたりについてはいかがででしょうか。

陣内: 建築学科っていうのは、都市系の人ほとんどいないんですよ。建築家ばかりだと、建築に完結しちゃうんですよ。

羽藤: 閉じちゃうってことですかね。

陣内: 閉じちゃうんですよ。しかも (スタジオで) 選んでくる場所は、原宿とか渋谷とか青山とか。もう既に出来るがって、もう価値も持っているところに、さらに価値をアップするような発想が多い。でもね、欧米の都市を見てると、都市計画で注目するところは、取り残された、問題含みで、そういう土地に着目するわけですよ。

羽藤: そうそう、だいたいそうですね。

陣内: 都市のトータルな姿とか、変容ぶり、要するにバランスがとれていた都市と地域の中で、ばらつきがあったり、取り残されている問題。スラムなんてのが一番に問題としてあった。インナーシティ問題もです。そういうセンスで、都市を見るっていうセンスがないんですよ。

羽藤: 寿町だったりね、黄金町だったり、ああいうところの経験がおそらく若い人ない。まちをどう体験してきたかっていう幅から生まれる発想、そこから価値を転じていく、色んな暮らしを汲み取っていく、考える範囲がちよっと狭いですかね。

陣内: 社会的経験がないですよ。リアルな経験が乏しい。これは学生だけのせいじゃないわけ。

羽藤: 大人もね、そこどうかっていわれるとちよっと (笑)

陣内: 大人もねだんだん怪しくなって、先生がもうだんだん怪しくなっちゃってる (笑)

都市計画だったらね、なおさらそういうところに注目してほしい。

羽藤: 静岡市は実はすごく実は広いんですよ。都市計画設計提案競技なんだけど、都市計画区域なんて堅苦しい縛りを設けるつもりはないので、上流の方に向かって行くと安倍川で、谷戸の地形を上手く使ってお茶を産業化してきた歴史があり、木材を積み下ろして運び出してきた歴史があり、その中に集落が点在していて、街道で静岡市に向かって結び付けられて、そこから清水港から出ていったという、土地の歴史があるわけですよ。

陣内: もうひとつの問題は、日本はやっぱりちよっとまだ都市計画都市計画って言いすぎますよね。

羽藤: (笑) 耳が痛い。

陣内: イタリアの連中とずっと付き合っていて 30 年くらい経つと、citta と territorio、対にして喋るんですよ。研究室も学科もそういう名前がどどんつくわけですよ。日本は建築学科の中には農村計画っていうジャンルがあるけれど、あとランドスケープの人はルーラルランドスケープとかいうけれど、ちよっと違う。

羽藤: すごく分かる。

陣内: 日野では、ほとんどが市街化区域です。あんなに緑があって、豊かで、水田も本当にあったのに、全部市街化区域になってしまった。農地を守っている人は犯罪人みたいに思われちゃってる。農地をどどん住宅地にするほうがまだよろしい、じゃあ区画整理をして無くしちゃうみたいなのが、都市計画だとしたら、都市計画には、もう少し全部をカバーするような発想がほしい。だから、まちづくりっていうのはそれに対して違う言い方で、そこからまだ少し可能性が開かれるのかもしれないけど、それでもイタリアという territorio というのは非常に重要な空間概念だと思って、日本語にならないので困るんですけどね。

羽藤: 都市計画だとゾーニングをやって区域を決めてくという手立てがあるんだけど、実は港湾法だったり農地法があって、都市のフリンジにあたる海側のこの領域と農地側の領域をどう取り扱えばいいのかについて、空間概念そのものが脆弱だという気がします。

イタリアはガラッソ法もあって、ちゃんと地域の風景をどう捉えるのかという領域の定義がしっかりしていて、空間価値が地域の中で互いに循環してるという感覚の中でプランニングがある。日本の都市空間の捉え方について、問いかけるような提案があると、今まで話してきた今日的な都市計画 - 都市設計の課題にも答えられるのかな、という感じはします。

陣内: 海からの発想ってなるとそれが絶対重要になってきます。川だって色んなところ流れてるわけで重要だと思います。

羽藤: 色んな川ありますからね。

陣内: アーバンエリアだけじゃないわけで、それが結んでたわけですよ。

羽藤: 静岡では、東海道という旧街道があります。水とか街道で見てくとかかなり、都市計画区域を超えて広がりのあるエリアの歴史が浮かび上がってくると思いますから、そこを読み込んだ上で、空間計画と設計を同時に考えてもらえたらと思います。

羽藤: 最後に、若手の皆さんに一言お願いします。

陣内: やっぱり我々の世代よりも少し後まで、パブルの頃までは、都市は成長するとか、経済的にも上向き夢を求めてたわけです。その頃は夢に可能性があったわけだけど、そうじゃない状況になった今、夢やビジョンをどう描くかというのは確かに簡単じゃないけど、いっぱいあるはずだと思います。一昨日、上海の研究者が水辺の工業遺産再生っていうすごいいいレクチャーをしてくれました。上海万博前後からものすごい勢いで、上海開発がすごいわけだけど、同時に工業遺産を積極的に残している。パワフルで夢があって、開発と保存とか再生とか両方もものすごい力があります。

羽藤: 上海は特に力がありますね。外灘のビジネス街だって一歩裏通りに入ると混沌とした生活景があって、下町も併存している。

陣内: みんな目が輝いてるよね。やるべきことがよく見えますよね。

羽藤: 上海は都市なんですよ。

陣内: 日本はそういう状況がなくなっちゃった。そういう中で、自分達の課題を掘えて、どう描くか。もちろん市民と一緒にやるのも重要なんだけど、市民が分からないことがいっぱいある。我々の街の眠っている構造を発見するのだから、やっぱりプロが頑張らないと、一緒にやってるだけじゃ駄目ですよ。ビジョンづくりも、問題点の発掘も。

羽藤: わかります。

陣内: そういうことを住民や市民と一緒に活動しながら我々も学ぶけれど、プロとしてプライドもって、技術センスを発揮してそれをビジョンに結びつけないといけない。それをやっぱり仕事として使命として、考えて貰いたいってことです。それが今の若い人達、担うの大変だって状況があるかと思うんだけど、だからこそ面白いことが多いんじゃないかと思うんですよ。テーマとしてね。我々が考えられなかったようなことをね。

羽藤: 専門性を確立するのは重要なんだけど、安易にその檻に入っていくんじゃないって、やっぱり都市全体のことをしっかりと見て考えてほしいのはあります。

陣内: 複雑系の中で問題をちゃんとたてるという逞しさと、本当はすごい interdisciplinary にならなきゃ駄目だと思います。

羽藤: はい。今日はありがとうございました。で、一応終わりなんですけど (笑)、もう少し続けませんか。

陣内: 福井に昔行ったことあるんだよね、川の調査で。朝倉家の、一乗谷まで舟が登れたんですよ。中世末期の城下町があって。日本で中世ブームが 80 年代にあったんだけど。あれと草戸千軒っていうのが非常に注目されたんですよ。福井の町も面白いですよ。川の向こうに遊郭があって。福井は大火でやられちゃったけど、歴史の文脈はわかりますよね。古い建物は残ってないかもしれないけど。

羽藤: 福井は骨格になる水路は中心部も外も残ってい

ます。しかも地形的な制約があるから、わりとまちなかも密度がある感じですよ。スケールがいいというか、河川もそうなんです、街の骨格がいいという印象ですね。

陣内：北陸のへんもいい街多いですよ。高岡とか。金沢もそうだけ。

羽藤：法政はどういう卒業設計多いですか、最近。

陣内：ほんとに、アーバンなもの少ないですよ。

羽藤：寂しいですね。

陣内：難波和彦さんが大学院指導しにきてくれたりして、アーバンの歴史を読み取る学生を応援してくれたりはするんだけど（笑）。

羽藤：都市の価値が伝わらないといけない。建築単体でやっているとやっぱり袋小路になっているところもあると思います。都市の可能性を感じ取ってる子は敷地の外に展開するんだけど、都市は解き方が難しい。歴史も読み解いていかないといけないし、空間の文法も考えないといけない。私有地と公有地があって、構想だけならいいんだけど、いざどうやって実現するのかってとこも学部生ぐらいだとなかなか分らなかつたりするから、結局敷地に閉じてしまう。それでもやっぱり知的に冒険してほしい。傷つくのが怖いというのもわかるんだけど。

陣内：あんまり強くも言えないしね。強く言うと、設計の授業もちゃんとやれとか、もっと負担を、なんか言われちゃうから（笑）。

羽藤：そっちですか。（笑）

陣内：でもね、大学院のスタジオはひとつやってるんですけど。なかなかおもしろいですよ。

羽藤：どこでやってるんですか。

陣内：3年くらい、ずっと、江東、墨田をやってます。去年もすごく面白かった。ほっとかしとくとみんなマンションになっちゃうんですけどね。そうじゃない方向で、地元の蓄積されている土地のものづくりの遺伝子を生かしていく。だって町工場とかいっぱいあるわけで、駅前じゃないちょっと面白い商店街もあの辺りはいっぱいありますし、今は打ち捨てられてるんだけど、逆に今から可能性がありそうな運河も多い。そういうのを探しながら、もう一回、複雑系の都市を考える。

羽藤：橋があって橋詰があって、バラベツト護岸なんだけどその裏にちょっとした神社やスペースがある、夕方くらいに歩いてると隅田川沿いに風が吹いてきて、気持ちいいですね、しかも、水が近くて面白い。

陣内：みんな、行ったこともないんだよね。そういうテーマでやったこともない。それと、最初はグループで作業するようにカリキュラムを組んでいます。学部での建築の設計だと個人ばかりなんだけど、グループでやって、前半はサーベイ。で、あそこの場所の特徴を歴史的に空間的に把握した上で、問題を探りだして、テーマを探して、そこまではみんなでもやる。あとで建築に結びつける提案は、一緒にやってもいいし、ばらばらにやってもいいというふうな。去年は一緒にやってくれて面白かった。

羽藤：サーベイの教育は重要ですね。建築でも都市でもそうなんだけど、歴史とか人文系のサーベイの方法だったり、もっと土地の歴史をアーカイブする方法やプランニングやデザインにしている方法は色々ある。そういうところも課題なのかなと思ったりしますね。

陣内：今日の午後、フィールドワークっていう名前の演習で、3年生の4月からやって、今日発表の日なんだけど、毎年面白いですよ。街に繰り出して、なんでもいから、一棟木造の住宅でもエリアでもいいから図面化して考えろって課題なんですよ。設計スタジオ以上に頑張る人も多いです。ほんとに面白い。数年前に、三原橋の川の一角にシンメトリーで、シネパトスって映画館あったんだけど、あれ全部実測して、全部すごい模型つくってきました。

羽藤：あそこは味わいがありますよね。昔あの辺りで働いて、通ってましたけど、人も面白いし。

陣内：三原橋の模型は力作でびっくりました（笑）。今

も商店街組合の事務所においてあるんですけど。

羽藤：三原橋は映画館が閉じましたよね。

陣内：閉じました。あれなんとか残せないかって、

羽藤：あれこそ都市ですね。

陣内：戦後の輝くアーバンスケールのプロジェクトの代表的な成果物。ああいうセンスがなくなっちゃったんですよ。

羽藤：機能だけで考えるとああいうところはできない。

陣内：民間のデベロッパーがやる再開発はいっぱいあるけど、公的な不法占拠みたいな、なんというかの空間みたいなことになっちゃって、東京都は嫌がって追い出しにかかってたわけですけどね。出ちゃったあとすっきりしたら、あれを残してもいいんじゃないかなと思うんですけどね。あんなとこで再開発なんてありえないからね。

羽藤：東大では、工學院の学生さんたちと一緒に、いま演習でちょうど渋谷の計画をやっています。

陣内：渋谷の80年代が面白かったのは、谷底のセンターからこっちとかこっちとか（放射の）方向に600mショックとかも言いましたが、駅から離れると面白いことが仕掛けられて、そのほどほどの距離と地形とむすびついた新しい展開と。古いところは古いとこで頑張っているところですよ。奥座敷は円山町とかいかがわしいところで、谷があるから、そういう複雑な、エロスな部分も高級住宅地には及ばないみたいなのところがある。全然違う役割をした丘と谷があって、全体としてやわらかい複合系をつくっている。すごく変化にとんでいて、新宿だと、のべたつとしたところに基盤型になって、一番奥に歌舞伎町あって、それとはまた違う構造が生まれて面白かったりする。

羽藤：都市的なところだからか（笑）、グループでやるのもめんどいんですけど、読み取りが難しいのかもしれない。若い人が議論が苦手というのもある。自分の中の論でちょこちょこやるみたいな方法論が得意なんだけど、都市の問題はなかなかそういう方法だけでは解けないので。早稲田なんかは卒業設計を3人でやるように変えたじゃないですか。

陣内：そうらしいですね。結果どうなんですか。

羽藤：分かんないですね。ちょっとびっくりしました。修士設計でちゃんとしたものをつくるってところらしいです。一人の知識でやってその中で閉じるよりも、という話だとしたらわかるんですが。そういうえば、今回の提案競技もチーム応募を前提にしています。

陣内：これ全国でやるんですか？

羽藤：今でてるところだと、全国から9チームで、若手で実務で都市設計やっている人もいれば、ランドスケープの学生さんや土木の設計者も参加しています。

陣内：マルセイユの都市づくりって面白いんですよ。ウォーターフロント、ベイエリアなんですけど。マルセイユが一番古い有名な港っていうのは、ちっちゃい奥の深い港なんですけど、もともとギリシャ時代から始まった港です。一方、西側の高台にギリシャの古いコアがあって、東の高台には有名な教会がある。なかなか地形が面白い。旧港っていうのはほんとにちっちゃくて近代には全然駄目なんで、西側の海沿いにずっと発展させていくんですけど、第一拡張期、第二拡張期、第三拡張期となって、第一拡張期のところは、まちづくりの会社が関わっていて、公と私が投資してみんなでも、でっかい倉庫もリノベーションして、活気のあるところに生まれ変わっています。さらに西側にいくと、まだ創業してる工場とか港の機能がある。そういうところを変えていく必要があるというときに、プロの人たちでWSを仕組んで、経済学とか地理学とか色々な分野の専門家も参加して、チームが5つか6つくらいできて、それぞれ5人ずつくらいで議論するわけです。フランス語圏の各地から来る。アラブ系の人もあるし、イタリアの人も来て。僕も審査会呼ばれたんですけど、面白かった。都市の問題をまさにウォーターフロントの再生だから、経済や人類学やもちろん

建築、都市計画の人もいた。

羽藤：複合領域ですからね。

陣内：それを一週間で集中的に、サーベイから始めて、でプレゼンテーションまでを一気にやってしまう。面白かったです。

羽藤：インターナショナルにはその道のプロがWSで考えるといったアプローチが増える気がします。私たちが復興デザイン研究体っていう組織をつくって、経済や農業、歴史、情報や法律まで含んだ形で東京や地方都市、アジアの都市の問題を考えていけるような組織にしたいと思っています。でも、そのためには個人が個人が地力をつけないといけない。博士課程の学生さんや若い専門家がちゃんと専門性を深めて、議論して、都市とは何かっていう哲学的な視座がちゃんと即地的にプランニングやデザインとして空間に着地するところまで持ち込まないといけない。予算がついてるとか敷地があるからではいけない。新しいものを生み出すエネルギーが喪失している気がするの、そこを転じていきたい。価値があるものは揺らいでいないし、困っている人もいるはず。だったらちゃんとした空間をつくってほしいんじゃないかなと思っています。

陣内：そうですね。行政とデベロッパーも、なんかやればいいのと思うんだけど。

羽藤：仕事の作り方が下手だという気がします。本当に必要なアイデアの出させ方が弱い。

陣内：一昨日上海の話聞いちゃったからなんと違いがでちゃったのかと…あれがいいとは思わないけど（笑）

羽藤：都市的な資源からすれば、東京は持っている資源を生かしてない。資源にちゃんとプランとかデザインがかけあわさったものにはなってない。単に予算がついてるから事業が粛々と進んでいるところをどうやって超えていくかを考えないといけない。

陣内：上海だと万博会場で同済大学の案が採用されて、大学も貢献しています。

羽藤：向こうはコンペも多いです。中国のコンペに参加すると、ものすごくアクティブで、次から次へと、都市に関するアイデアを競っています。中国の中の人、僕らみたいな外国人も、みんなが全力で考えるから色々なレベルのアイデアがどんどん生まれていっている。そういうところからすると、東京や日本の歴史のあるいい都市、あるいは面白い都市、色々あるんだけど、日本の都市に対するアイデアがあんまり出てきてないんじゃないかって思いはある。先祖代々の自分の土地は守りましようっていうようなところに終始して、それこそ土地土地の領主がアジア各地の状況を見ながら投じた空間計画を考えると、そういう発想も重要ではないかと思えます。

陣内：プランニングや都市設計のためのサーベイを考えると、自分の想定しているテーマとかシナリオ、ある仮説があるわけですよ。その枠組をあまりにも現実の中で押し付けちゃって、ああこういう結果がでたっていうやり方はあるんだけど、一方で、発見的に、行ってみたらこんな面白いことあるとか、考えてたのとちょっと違うんだけど、そこから引っ張ってくるのと両方あると思います。全く準備なく土地に行って、ただただ現実そのものを記述してくるっていうのは除外したとして。原広司さん達がやったのは、最初からフレームをつくって、わーっと現地に行って、自分の枠組みで解釈するっていう方法ですよ。

羽藤：サンプリングして論理を検証する方法ですよ。

陣内：あれはあれでいいですよ。設計するっていう目的があるから。でも僕はちょっと立場が違う。最初にやっぱ仮説がなきゃいけないし、もちろんこういうことを引っ張りだそうっていうのはあるんですよ、だからそれに乗っかってくれそうな場所を選ぶんですけど、場所を選ぶ根拠は、自分が今までやってきた経験を踏まえて、次はこんな欲しいって選んで選んで選んで。でもね、行ってみると全然違う。やってみる間に発見っていうのは当然ですけどある。例えばスペインのアンダルシアで調査をやって、こういう本出したん

ですけど、隈研吾さんがこの本書評してくれまして、まあ最後に種明かしが書いてあって、彼はグラナダでオペラハウスやってるらしいんですけど（笑）

羽藤：そこに結びつけるんだ（笑）。

陣内：僕は、ともかくパティオのある、中庭型住居から構成される都市に地中海全体で興味があった。それに一番ふさわしいアルコスっていう街を発見して徹底的に調べた。でもやってる間にだんだん違うタイプの街もあるってことに気がついたわけです。中庭なんて全くない、上にちっちゃいダイニングがある。でもこれはこれで面白い、ピクチャレスクなわけです。斜面都市だから。2つの系列があるってまず気がついて、次に、都市と田園の関係が重要であると気がつく。都市によって関係がいろいろ別れているわけです。レコンキスタを経てイスラムの影響が消えちゃうところもある。残るところもある。だから歴史と空間軸で、我々が想定した枠組みを現実の都市をはるかに乗り越えられちゃうんです。そういうことをいくつか経験した調査っていうのは一番嬉しい面白いですね。アマルフィもずっとやってるんですけど、最初はアマルフィの歴史的街区だけやってたんですが、だんだんアマルフィ共和国、アマルフィ海岸、世界遺産のところ全体の中で、きら星の如く街が散らばっていつてるんだだけ、丘の上、山の中にもあって、全体でテリトリオをつくってる。役割分担しながらお互いが支えあって。丘の上、山の中にいる連中もみんなオリエントと交易したりね。拠点があったりするわけです。

羽藤：土地には流動があるんですよね、必ず。

陣内：重要なのは紙の生産をヨーロッパで最初に取り込んでやったのがアマルフィなんです。それはアラブとの付き合いなわけです。中国から伝わった製法がアラブからイタリアに入ってくる。その最初の窓口がアマルフィなんです。イタリアでは木綿をつぶして紙にするわけですが、木材じゃないので圧力かけなきゃいけない。そうすると水車を使ってやるわけです。水車を使うには、渓谷の水の流れが強いところがいい。それでアマルフィぴったりなんです。中世から水車使って、それまでは製粉に使ってたんだけど、工業に使いはじめる。それがだんだんわかってきて、アマルフィの背後の渓谷だけじゃなくてあちこちにあるわけです。最後は製鉄までやるんですよ、それでようやく近代につながってくるわけです。

羽藤：この提案でそういう迫り方をしてくるチームがあるといいですよ（笑）

陣内：（笑）

羽藤：静岡だと阿部川があって、地形があってお茶や木材加工がある。土地の理を読みこんだ独自の産業や暮らしと風習があって、そこまでつかみとって町や港が存在している。

陣内：だからヒンターランドとの関係は重要なんです。ね。

羽藤：それが本当の都市計画なんです。

陣内：だから都市計画って言っちゃいけない（笑）。

羽藤：日本語だとい言葉がない。ruralですかね。

陣内：地域計画っていうのもちょっと曖昧な言葉なんです。ね。

羽藤：地形と歴史から読み解いて、今を未来にどう継承するかっていう計画論ですね。

陣内：そう。それをちゃんとね、日本で論理的に突破していかないと駄目だと思う。都市は背後のヒンターランド、テリトリオと一緒にあってポテンシャルのあるもの。それもひとつの都市だけでなく、周りの町とか村とつながって、川沿いとかね、ポテンシャルがあったわけじゃない。その力をもう一回引っぱり出さないと、市町村合併だけでただ水増して繋げているのは何の意味もない。そういうの全部を扱うdisciplineは、都市計画という言葉に相応しくない、というか収まり切らない。

羽藤：地理が重要なんでしょうし、地域計画という言葉なんですよけど、地域計画っていう言葉は日本の中では弱い。

陣内：弱い弱い。地域っていうのは大きい地域もあるし小さい地域もあるし、日本の中だと。はっきりしないんですよ。これ大きなテーマですよ絶対に。

羽藤：ただ静岡市は広いので、安倍川もあるし、東海道もある。そういうところを彼らが掴み取れるかっていうのは大きな問題です。

陣内：ほとんどは静岡のことを勉強したいんだけど、なかなか、夏は日本にいないので（笑）

羽藤：分かってます（笑）じゃあ、例えば福井の都市計画お願いしますって言われたら、どういうところから考えますか。やっぱりさっきのようなアプローチですかね。

陣内：今ならテリトリオとの関係だと思います。

羽藤：都市が今本当に考えなくちゃいけない問題っていうのは町中よりも圧倒的に周囲ですよ。僕は都市計画とか頼まれるとだいたい最初に外側を見に行きます（笑）

陣内：だってやっぱりさ、昨日もトリノの人たちが来てただけでさ、地産地消というのほとんど大きいと思うんですよ。豊かさを地域内で育てないと。キロメートルゼロっていうんですよ、イタリアの合言葉。農と住が一体化してるってことですよ。ほんとにそれ真面目に言ってます。それが人間の幸せ、面白さ、地域の豊かさにつながるじゃない。だから目標として早く強く打ち出さないとイケない。

羽藤：そういうことは生活体験がないと分かんないのではないかと思います。うろろう放浪してるとそういうこと考えたり暮らしてる人にぶつかるじゃないですか。そういう人に着いて行くと美味しいもの食べれたり楽しかったりする。そこの体験が教員の側も足りてないのかもしれない。都市計画を考えようとしたら、より広域なことほど歩きまわってその土地を体にいれないと描けないのではないですか。

陣内：福井市って言った時に、そのテリトリオを構成している要素がなんなのかっていうのが大切でしょう。市っていつたって歴史的街区に建物はないかもしれないけれど、そこにはコアがある。近代の拡張があって、その後の高度成長期以後のだから広がった郊外がある。そして田園がある。もともと田園の中にも農村が集落があった。そして、工業地帯とか、新しく出来たエリアがある。それがどういうヒエラルキーの構造で、今どうなっていて、どこが発展してて、どこが衰退してるのか、全部わかんないとまずい。

羽藤：都市計画だから。

陣内：で、どこが面白いのか、どこに価値があるのか。

羽藤：そこまで考えると学生時代に拘って考えたであろう卒業設計なんかで取り上げたものとは全然違うかが見えてくるかもしれない。卒業論文や卒業設計ってその人の価値観が顕れるものだから、風呂敷はできるだけ広げた方がいい。そこまで大きく視座をとって一旦射程に入れて手を動かして、結果的に水のある素朴な生活景を描くことになるかもしれないけれど。でもやっぱり都市のことを考えてほしいと思うんですよ。

陣内：一般論として近代には水の空間が、裏返し、無視され、放置され、汚れたっていう歴史がある。でも今戻ってきてるわけです。そこ使えるわけですよ。欧米だけじゃなくて、アジアも含めて水の空間から再生していくっていうのはわかりやすいテーマだと思う。だから僕らもそれにこだわってるんだけど。福井の場合も川があるから、それはひとつの手がかりだと思うんですけど、それだけじゃない。もう一回、近代を経て変容したものの良さを引き出しながら、また価値与えて再構成していく。その時、何が拠り所の軸になるか、ファクターになるかっていうストーリーを、シナリオをつくるのが大きいと思います。

羽藤：学生さんだけでなく、大人もそうなんですけど、知的スタミナがいるから。逸らさないことが大切だと思います。目標を狭く設定して解きましたっていう方がどンドン空間は出来あがるから。でもそういう行為の積み重ねじゃどうにもならないっていうのはも

うわかったはずだと思っんですよ。やっぱり総体としての都市を全体を本当に広く深く捉えるっていうところから入るっていうのが基ではないでしょうか。でも建築の卒業設計、そうならない（笑）

陣内：建築はならない。絶対そうならない。

羽藤：都市はできるはずなんですけど。

陣内：できる。

羽藤：でも、よく言われることではあるけど、どんだん都市が建築化していくか、あるいは都市そのものを計画したり、空間を考えることが放棄されているようにも感じています。きれいに敷地の中をつくるみたいな提案を出してくる若い技術者もいるかもしれない。彼らは働きながらという制約の中で出してくるから。だけどやっぱり都市的に考えて、それが形になった提案を評価してあげたいなというのはあるわけです。逆にそれがこの計画-設計提案競技に参加している全員になかったとしたら問題だと思うんですよ。

陣内：この提案競技では、扱う範囲っていうのはそれぞれの人考えるっていうことなんです。ね。

羽藤：ええ、わざとそうしたんです（笑）この計画-提案競技では、あえて敷地を限定しませんでした。

陣内：今言ったような話していいんですか。

羽藤：はい。この計画-設計提案競技って。通常の建築なんかのコンペじゃないんですよ。そこが最大のポイントです。要するに東海道や安倍川のような歴史があって地形があって河川があって港があって古い流動の積層があって、そこから土地性を読み取った上で、今静岡という都市の問題を再定義してなにかを自分たちで選びとって、それにどういう価値を与えようとするのかが問われる。それが本来の都市計画-設計競技であるべきだと考えました。陣内先生はそういうアプローチを体現してきた人です。内藤先生は静岡で草薙競技場の設計をやっていて、静岡県の地産ということでも造で今つくられています。建築的にその土地をどう読み込んで地域の拠点としてどう解こうとしているのか、建築とか空間が具体的に地域でどう展開されていくのかっていうのはやっぱりみんなに考えて貰いたいんですよ。ちっちゃな建築をここで提案してきてもらってもいいし、マスタープランが災害を考慮した強い計画であってもいいと思うんです。色んな切り口が最後は出てほしいなと思います。農学部の子もいるから、ランドスケープ的なヒンターランドの計画であってももちろんいいと思うんですよ。当日はぜひよろしく願ひ致します。今日はありがとうございました。 ■■■

インタビュー 開校にあたって

内藤 廣

聞き手：羽藤英二

内藤 廣 ないとう・ひろし

1950年神奈川県横浜生まれ。1974年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1976年同大学大学院修士課程修了。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年に内藤廣建築設計事務所を設立。2001年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学助教授、2003年から同大学大学院教授、2011年。2007年からは、グッドデザイン賞審査委員長も務める。

主な建築作品：海の博物館（三重県鳥羽市）、安曇野ちひろ美術館（長野県北安曇郡）、牧野富太郎記念館（高知県高知市）、ちひろ美術館・東京（東京都練馬区）、みなとみらい線馬車道駅（神奈川県横浜市）、島根県芸術文化センター（島根県益田市）、とらや東京ミッドタウン店（東京都港区）、JR日向市駅（宮崎県日向市）、JR旭川駅（北海道旭川市）など多数。

近著：2006年『建土築木1』、『建土築木2』鹿島出版会、2008年『構造デザイン講義』王国社、2011年『環境デザイン講義』王国社、2012年『内藤廣の頭と手』彰国社など多数。



羽藤：内藤先生、今日は宜しくお願いいたします。

内藤：はい。

羽藤：復興デザイン研究体の「復興デザイン 静清計画 2013 を考える」U30の都市計画設計提案競技の特別審査員ということで今回は宜しくお願いいたします。

内藤：特別審査員に任命していただいて光栄でございます（笑）。

羽藤：お題となっている都市計画と都市設計ということですが、なかなか両者は別れてしまった言葉という気もしているわけですが、内藤先生が都市計画で重要だと思うこと、あるいは都市設計とは何かということ、都市設計と都市計画が相互に持つ意味と互いの関係性について、まず最初にお聞かせいただけますでしょうか。

内藤：基本的には非常時と日常時がどうやってブリッジされているかということで計画はなされるべきだと思います。けれど、都市計画の概念自体が非常時はないという前提に立っていた。たぶん、20世紀初めあたりから都市計画の歴史を考えると、非常にオプティミスティックですよ。けれど振り返って中世都市はどうかというと、あれは軍事的な防災都市ですから、それ以前の歴史を見ても、軍事的な防災都市です。だから、もともと都市というのは、アテネだとかスパルタだとかベルセポリスだとか西安だとか、軍事的で、ある種非常時のために作られた中で、どう日常が展開されるかというものじゃないですか、本来。

羽藤：そうですね。

内藤：けれど、基本的には近代的な都市計画概念に非常時はない。どうしてかということ、近代的な生産諸力、つまり建築あるいは都市にまつわる技術にしても、非常時を乗り越えられるという前提で組み立てられているので、非常時でも大丈夫という仮定で、とりあえず考えないことしようというのが近代的な都市計画だった。けれど、それが役に立たないというか、それじゃまずいんじゃないかというのが、3.11以降の話だと思います。本当は9.11で気がつかないで済んだ。あるいはその前の阪神淡路大震災で気がつかないで済んだ。それぞれ多少は気がついたんだけど、本気では気がついていなかったのが、こう延長線でやってきたところが問題なんだろうと思うんですよ。

羽藤：いまなおそういう問題は我々の眼前に突きつけられているはずですが、だけどややもすると忘れていて何とかなるということもあって、いつの間にか東北の問題もだんだん目に触れることが少なくなってきて、忘れられていると思います。そういう中で、改めて今復興デザインとテーマで、若いU30の世代に都市計画と都市設計を同時にどう考えてもらうかということが、この都市計画設計提案競技だと思っています。2つ目にお訊きしたいのは、内藤先生は今草薙の競技場の設計をやられているわけですが、先ほど都市計画と設計がどういう関係にあるのかについて、あるいは地域のコンテクストみたいなものと建築がどう向き合うべきかについて、若い学生さんや建築家、都市計画家の皆さん多いと思うんですが、静岡で今設計をやられていて、都市計画との関係性の中で重要だと考えていることがあれば聞かせられますか。

内藤：一番簡単な話は耐震設計どうするかという話です。これはわかりやすい。草薙の体育館は地域係数1.25、それから建物の重要度係数といって、いざという時にこれは大事ということで係数が掛かって、それが1.2。両方掛け合わせると1.5なんです。つまり通常の重要度係数が掛からない建物の1.5倍の強度を求められる非常に高いハードルがあった。それに加えて、これは知事と話をして、静岡県は山を抱えているので、木材振興もしたいので木でやろうと。

羽藤：なるほど。

内藤：だから、割と大スパンを重要度係数を掛けて通常のこのあたりに建っている建物の1.5倍くらいの強度で作って、それを木造の大加工で造れるかどうかと

いう、三重苦みたいなテーマです。

羽藤：難易度が高いわけですね。

内藤：これが一つですね。なので、おそらく草薙の建物は、ゼネコンの人たちにも言っているんだけど、技術的には日本中で動いている建物の中で一番高度だと僕は思っているんですよ。一番洗練されてなきゃいけないし、一番高度な技術を駆使している。その意味において、超高層なんかよりよっぽど難しい建物を、最先端の解析と最先端の技術を3つくらい組み合わせでやっている。草薙で木材を使うということは、地域や広い意味での広域のエリアの意識を汲み取っているということと、いざという時はそこに逃げて来て、みんなそこで避難するというような意味合いと、いざという時に頼りになるという意味合いが込められている、そういう感じですね。

羽藤：わかりやすいお答えでありがとうございます。3つめの質問ですが、こういう都市計画や都市設計を評価したいとか、これは評価したくないというものがあれば、お聞かせいただけますでしょうか。

内藤：1つはですね、僕はずっと思っているんですけど、建築の体内時計と、都市の体内時計と、もうちょっと広がりのある土木とか景観とかいわゆる自然も含めた体内時計が、全部違うことに本当は問題があるのではないのでしょうか。だから、今か明日とかも実は楽しくなきゃいけないんですよ。いかにも防災上素晴らしい都市ができたとしても、若い人がどんどん出て行って滅びる町だってある訳ですよ。三陸を見れば大体予想は付きましますけれども。確かに防災的には素晴らしいけど人はいなくなったねというのはおかし。やっぱり今日も明日も来年も、生き活きと楽しく若者が希望が持てるようなそういう時間も持たなきゃならない。片一方で、50年とか100年にいっぺん起きてくる大きな災害にも対応していかなくちゃならない。これは別の時間軸ですよ。だからこういういくつもの時間の層を同時に持っている都市が、僕は健全なんじゃないかと思う。長い時間も保証してくれているので、じゃあ私はその町で是非子育てをしたいと思えるかどうかという、そういう感じだと思うんですよ。

羽藤：なるほど。

内藤：そういうのが建築でも都市でも、いいものなんじゃないかなと思います。

羽藤：最後に若手のこの競技に参加している技術者や大学院生とか学生さんに対して、何か期待することや一言ありましたら。

内藤：これだけ大きな価値変動を迫られている時代はないと思うので、もし心様が許してくれるなら、僕は40歳若返らせてもらって、今の時代に生きた方が面白かったと思うんですよ。

羽藤：そうですね。

内藤：つまり、僕らの時代は高度成長のひとつの右肩上がりの社会を生きてきたので、この社会というのは前例主義な訳ですよ。だから、前の人の言うことを聞いているとまよくいからあんまり変わったことをすると、こう言われる訳です。これからはどうなるかわからないじゃないですか。だから、自動車という、バックミラー見て前も見ながら安全運転すると行けますよと。ところが、ここから先はたぶんバックミラーばかり見ていると事故を起こしちゃう時代になっちゃうので、こういう時代はやっぱり若い人がもっと活躍しなきゃいけないし、若い人が沢山発言しなきゃいけない時代になっていると思うので、そのくらいのつもりでこういう企画に取り組んでもらいたいし、もっともっと前に出てもらいたいと思います。

羽藤：わかりました。ありがとうございます。

内藤：終わり？

羽藤：終わりなんですけど（笑）、今回広域って入れたんですよ。

内藤：広域というのはどのくらいまでのこと？

羽藤：リニアができるじゃないですか。縮退の時代でもあるし、中米口との関係も変わってくる。そういう中で東海道をやっぱりもう一度ちゃんと定義づけるべきだと思ったんですよ。あそこは次のリスクが一番高くて、浜岡もある。それから縮退。どうやって太平洋ベルトの一番コアになっている地域をやっていくかは、日本の生命線だし、環日本海が重要になるとかいうんな話はあるけれども、そういう広域的な構想と日常生活を重ね合わせたところで、建築や都市や土木が一体何ができるのかという提案がないといけません。内藤先生がおっしゃられるように、若い世代の責任だと思のです。これから10年、20年、30年と彼らが生きていく中で、コミュニティはもちろん大事なんだけれど、本当に考えるべきところを逸らしているんじゃないかという印象があって、敢えて静岡の地元の方も、事前復興？、えっ？、災害？、えっ？という感じですし、東北の話もだんだん遠ざかっている中、そういう状況に対して突きつけるようなものを若い方には是非考えてもらいたいなと思いました。内藤先生からも厳しい講評と審査を、次に生きようような厳しいコメントを頂いた方が良いというようなことをちょっと思っています。

内藤：リニアはどこ通るんだっけ、山梨だっけ。

羽藤：山梨ですね、今駅の計画立ててますね。

内藤：名古屋まで行って、大阪まで行って、大阪まで行くのが30年後ですかね。基本的には僕はツインキャピタルじゃないかと思っているんですよ。

羽藤：わかります。

内藤：ツインキャピタルで、両方双方にBCP機能を持っている。どうしてかということ、近隣諸国が核武装してミサイルが飛んでくるかもしれないといったとき、本当に（首都が）1個で良いんですかという話があります。いわゆる防衛上の問題として、リニアで結ばれる以上は、ツインキャピタルというのはありそうだなという気がしている。そうすると真ん中あたりに中継地点が名古屋とそれから静岡がある訳です。特に静岡はそのルートから外れる訳だから、静岡の意味合いをどう見出していかはとても大事だよ。どうやって生きるんだらうと。

羽藤：リニアによって東京圏と名古屋圏と遅れて大阪圏が寧ろ膨張するのではないかと、圏央道も含めて考えると、静岡が中途半端な位置におかれてしまう怖れがあります。文化もあって歴史もあって産業もあって、それをどう生かして、あとは広域防災拠点になるといった時、都市計画と都市設計において何をどう描くのかという話ですよ。

内藤：目下のところは良い位置取りをしていて、例えば港湾があって、部品産業や車だとかの産業が位置するには、東京とか名古屋を両方睨んで良い場所ですよ。浜松もあるし。だけどその構造が変わってくるかもしれない。

羽藤：問題は東海・東南海・南海地震後に日本がどうなるかということ、リニアが出来て大阪・名古屋・東京の三極集中が極端に進んだ場合、歴史もあって文化もある東海道を下敷きに、製造業の拠点としての静岡をどう構想して、地域とか建築をどう解くのか、これらを同時にプランニングとデザインで考えてもらいたいと思います。難易度が高い訳ですが、従前の学生だけでなく、若手の技術者に加わって頂いて、そういう人が何を考えるべきかといった方向性が出るのではないかなという気がします。

内藤：最近ちょっといろいろ言っていることなんですけれども、若い女の子が子供をここで産んでもいいと思えるかどうかというのが、私の価値判断の基本にあるんですよ。

羽藤：そんなに若い女の子と話さないでしょ（笑）。

内藤：でも仮に若い女の子がいて、子供を産むという

ことですよ。そうするとそれは安全であるかということですよ、その子が育っていく上で。でも若い女の子はじゃあ片田舎で良いかということすらでもなくて、そういう気分になれるかどうか。

羽藤：静岡は女性が多いらしいです。

内藤：ああそう。じゃあ良い街なんじゃない。三陸なんかに行くと、若い女の子がどう考えるんだらうなというので、そうするとこれからはその子たちがその場所を去る要素は2つあるかもしれないね。例えばこんな高齢化していくところで無理だという話と、もう一つは災害が来るかもしれないという恐怖感と。本当は男なんかはどうでも良くって、若い女性がそう思えるような町ができればたらたぶんそれは正解なんだと思うんですよ。

羽藤：女性のプランナーや建築家が重要になってくると。

内藤：女性が女性のことがわかるとは限らない。

羽藤：奥深いことをいう。まあ、男が男のことをわかっているかと言われてもね。

内藤：ただそういう風なイメージが作れないと、人口はおそらく減っていく。現在の静岡でそういう要素が、要するにポジティブな要素があるのであれば、それはアクセルを踏んで加速すべきだという、そういう感じですよ。

羽藤：今日は、ありがとうございました。 ■■■



提案内容： 東京計画 1960 の 10 年後、丹下健三は静岡地区マスタープランにおいて、静岡と清水という複数都市を対象としながらもモビリティ・建築・ランドスケープを包括的にデザインしたうえで、東海道メガポリリス構想と都市計画 - 設計を接続させた将来都市ビジョンを示した。

本都市計画 - 設計提案競技では、来るべき東海・東南海地震や人口減少といった計画リスクを事前想定したうえで、広域拠点としての対象地の個性を正面から受け止めた発展的な「復興デザイン」をテーマに、都市計画 - 設計提案を募集する。

土木・都市・建築分野における U30 の若手建築家や技術者、大学院生、学部生の手による建築・モビリティ・ランドスケープ・歴史・防災といった専門領域を横断する縮退の時代の都市像に期待したい。なお、提案内容は静岡市内を対象とした建築、街路、オープンスペース、港湾、モビリティといった個別提案に限定することなく静岡地区都市マスタープランや東海道広域計画といったスケールの大きな提案まで幅広く公募する。

ただし、内容については未発表のものに限る。

要求図書： A1 版用紙 2 枚，模型 ※当日持込

締切： 一次提出 2013 年 9 月 7 日（土）pdf 形式
最終提出 2013 年 10 月 7 日（月）pdf 形式

応募資格： 大学、大学院、高等専門学校及び専門学校に在籍している学生及び U30（2013 年 4 月 1 日時点で 30 歳以下）の若手建築家・都市計画家・土木技術者で構成されるグループを対象とする。ただし、第 1 回・第 2 回（次項参照）にグループ代表者が参加できること。（第 3 回は受賞者のみ参加必須）

参加費： 無料（実費）

審査委員： 内藤廣（建築家），陣内秀信（法政大学），窪田亜矢（東京大学），羽藤英二（東京大学）他

賞の種類： 最優秀賞 1 点，優秀賞 3 点

提出先： seminar@bin.t.u-tokyo.ac.jp

主催： 復興デザイン研究体 <http://bin.t.u-tokyo.ac.jp/dss/index.html>